

Loh Wei Leng et al. eds., Biographical dictionary of mercantile personalities of Penang (紹介)

著者	原 不二夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	55
号	3
ページ	119-119
発行年	2014-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006914

Loh Wei Leng et al. eds.,

*Biographical Dictionary of
Mercantile Personalities of
Penang.*

Kuala Lumpur: Think City Sdn. Bhd., Penang
and Malaysian Branch of the Royal Asiatic
Society, 2013, 227 + xviii pp.

原 不 二 夫

本書は、Loh Wei Leng元マラヤ大学歴史学科教授を中心とする5人の歴史学者が20人の研究者の協力の下に数年を費やしてまとめた労作である。採録されているのは、イギリス東インド会社のフランシス・ライト (Francis Light) がクダのスルタンからペナンを割譲させた1786年前後からマラヤ連邦独立 (1957年) 頃までにペナンを拠点に活躍した商人で、経済のみならず、政治、社会、文化面で果たした役割も記述されている。植民地統治下でペナンは、当初はマラヤ全体の、シンガポール開港後は北マラヤの、中継貿易港、開発拠点として発展し、ペナンの商人はオランダ領東インド (インドネシア)、タイ、仏領インドシナ、インド、アラブにまたがる広大な地域をその活動範囲に入れていたため、そうしたいわば国際面も視座に入れている。

欧州人、華人 (現地のローマ字綴りで記されているが、すべて漢字名、ピンイン名も併記)、アラブ人、インド人、マレー人など200人が記載されている。記述内容は、①ペナンでの事業内容、近隣諸国や生誕国など他地域と結ぶ事業、あるいは他地域での事業、事業の終息時期あるいは継承者、②植民地当局との関係、交友・姻戚関係、教育支援、会館や出身地団体への関与などの社会貢献、③清朝、中華民国政府との関係 (華人)、④戦後の政治活動 (特に最大与党の統一マレー国民組織〈United Malays National Organization: UMNO〉関連)、などである。

巻末には、ペナンの旧跡の往時の写真、古地図、採用項目以外に本書内で言及された人物を含む人名索引が付されている。参考文献目録は、公文書館所蔵文書、往時の公報や新聞・雑誌、私文書・書簡、

刊行書・論文、未刊行論文など極めて多岐にわたり、各人物の同時代文書が十分に斟酌されている。

本書を読み解くことにより、次のような点を知ることができる。(1)ペナン開港以前、あるいは開港前後に早くも定着した商人が存在する、(2)当初はイギリス人商人が圧倒的に多かったが、19世紀後半からは華人、次いでインド人、アラブ人が大きな勢力となった、(3)マレー人商人は、20世紀半ば以降に少数ながら出現した、(4)インド人商人、アラブ人商人の多くは、マレー人女性との結婚などによってマレー人として遇されるようになり、20世紀後半にはその多くがUMNOで指導的な立場に就いた、(5)多数が広範な「多国籍」活動を行っていた、(6)マレー人社会でも19世紀初めにカピタンが任命された例がある (アラブ出身アチェ人。16ページ)、(7)多くが複数の妻をもち、なかには「少なくとも7人」(121ページ)、「7人」(66ページ)という商人もいた (いずれも華人)。

極めて価値の高い有益な資料だが、もう少し注意を払ってもらいたかった点もある。あえて触れると、(1)各人の記述の長さに大きな差がある、(2)生没地が生没年の後に記されたり記されなかったりする、(3)日本占領期の活動については、ほとんど触れていない、(4)孫文の最も有力な支持者だった呉世栄 (Goh Say Eng)、黄金慶 (Ooi Kim Keng)、陳新政 (Tan Sin Cheng) のうち、呉の項目はあるが黄、陳は他の人物の項で言及があるものの、巻末の索引では落ちている。また、戦前から戦後初期にかけての政経両面での最有力華人の一人だった連裕祥 (Heah Joo Seang) などが落ちている。ただし、(4)に記したような重要人物については、本書参考文献にも挙げられている。

Penang Festival Committee [檳城慶展委員会] ed. *Historical Personalities of Penang*, Penang, Phoenix Press, 1986, / Tan Kim Hong [陳劍虹], *The Chinese in Penang: A Pictorial History* [檳榔嶼華人史図録], Penang, Areca Books, 2007 との重複を避ける意味があったのであろう。関心のある方は、この2書も見てください。

東南アジア全体の経済史を研究する上でも資するところ大であり、従来研究されてこなかった点についてもさまざまな情報を得ることができる。ぜひ一読をお勧めしたい。(元南山大学外国語学部教授)